

最近のトピックス

若年者の不正咬合に伴って生ずる 歯肉退縮の問題について

新潟大学歯学部歯科保存学第2教室

柳 村 光 寛

近年、若年者における前歯部の不正咬合によって生ずる歯肉の局所的な退縮や、歯肉炎の発生などの問題について検討されることが多くなってきている。歯肉退縮の原因として、成人では歯肉炎、歯周炎、咬合性外傷に続発するものが多いとされているが、若年者においては上述の原因のほかに、以下にあげる点を考慮しなければならない。

まず歯の萌出位置や方向が何らかの原因により異常をきたした場合、唇舌側歯槽骨の高さに違いが生じた結果、歯肉の退縮となって現われることがある。第2に、歯の唇舌的な幅径に比較して歯槽骨のそれが相対的に小さく、歯肉の退縮を生ずることがある。さらに下唇小帯の付着位置が高位である場合、歯肉の退縮として現われることもある。このような歯肉の退縮のみられる部位には、正常な形態を有する部位よりもプラークの蓄積が多くみられ、かつ清掃されにくい状態で放置されている頻度も高い。若年者において、これらの異常を観察したら、ただちに処置しないと不可逆的な問題が生ずる。即ち、退縮が持続し歯根の極端な露出にまで進行してしまう。問題の解決には歯列の矯正治療と歯周治療の両面からのアプローチが必要である。歯を正しい位置にまで移動し、プラーク・コントロールを徹底させることと、定期的な縁上歯石のスケージングといった初期治療（イニシャル・プレパレーション）によって管理すれば、容易に解決できることが多い。

筆者らが、前歯部の不正咬合を有し、かつ歯肉退縮のみられる若年者を観察し診査した結果、初診時には歯周組織に強い炎症のみられるものが多く、効率的なプラーク・コントロールがなされていないものが殆んどであった。このような患者には、まず何を行なったらよいのであろうか。若年者の場合、何らかのブラッシングを行なっても正しく実行されていないことが多く、歯肉には常に炎症が存在しているのである。この炎症を消退させることを主眼としたイニシャル・プレパレーションを行ないつつ歯列の矯正治療を行なってみた。その結果、術前の角化歯肉と付着歯肉の幅は、それぞれ2.4 mm と

1.0 mm であり、6～15 カ月の治療後では、2.7 mm と 1.7 mm となりポケットの減少と付着歯肉の幅の増加がみられている。これは、炎症の消退による再付着と、若年者の成長による歯槽骨の成長によるものと考えられる。かつて若年者の歯肉退縮部に盛んに行なわれた外科処置も、成長期にはできる限りさし控えるべきとする近年の趨勢から、その頻度は減少しつつある。成人において遊離歯肉移植後の付着レベルを長期にわたって観察した結果によれば、歯周管理が良好であれば、移植を行なわなかった部位との間に差はみられなかったという報告もある¹⁾。かつて Bowers²⁾、Lang & Loe³⁾ は、歯肉の健康を維持するには2 mm 以上の角化歯肉の存在が不可欠であると報告しているが、Lindhe^{4,5)} の最近の研究によれば、付着歯肉が存在しなくても、プラークおよび歯石などの起炎物質の完全な除去がなされている限り、歯周疾患は進行せず、付着レベルにも全く変化がみられなかったという報告もある。このように付着歯肉に対する考え方も多少変化してきたものの、若年者においては、成人の場合と異なり、成長の過程にあることと、原因の除去により組織は容易に治癒、再生しようという特長をもつため、歯周管理の良否が予後を左右する要因のうち大きな割合を占めると思われる。

文 献

- 1) Dorfman, H. S., Kennedy, J. E. and Bird, W. C.: Longitudinal evaluation of free autogenous gingival grafts. *Journal of Clinical Periodontology*, **7**: 216-224. 1980.
- 2) Bowers, G. M.: A study of the width of attached gingiva. *Journal of Periodontology*, **34**: 201-209. 1963.
- 3) Lang, N. P. and Loe, H.: The relationship between the width of keratinized gingiva and gingival health. *Journal of Periodontology*, **43**: 623-627. 1972.
- 4) Wennström, J., Lindhe, J. and Nyman, S.: Role of keratinized gingiva for gingival health. Clinical and histologic study of normal and regenerated gingival tissue in dogs. *Journal of Clinical Periodontology*, **8**: 311-328. 1981.
- 5) Wennström, J., Lindhe, J. and Nyman, S.: The role of keratinized gingiva in plaque-associated gingivitis in dogs. *Journal of Clinical Periodontology*, **9**: 75-85. 1982.